

新約聖書 ヨハネによる福音書 21 章 1 節—19 節（新共同訳）

¹ その後、イエスはティベリアス湖畔で、また弟子たちに御自身を現された。その次第はこうである。² シモン・ペトロ、ディディモと呼ばれるトマス、ガリラヤのカナ出身のナタナエル、ゼベダイの子たち、それに、ほかの二人の弟子が一緒にいた。³ シモン・ペトロが、「わたしは漁に行く」と言うと、彼らは、「わたしたちも一緒に行こう」と言った。彼らは出て行って、舟に乗り込んだ。しかし、その夜は何もとれなかった。⁴ 既に夜が明けたころ、イエスが岸に立っておられた。だが、弟子たちは、それがイエスだとは分からなかった。⁵ イエスが、「子たちよ、何か食べる物があるか」と言われると、彼らは、「ありません」と答えた。⁶ イエスは言われた。「舟の右側に網を打ちなさい。そうすればとれるはずだ。」そこで、網を打ってみると、魚があまり多くて、もはや網を引き上げることができなかった。⁷ イエスの愛しておられたあの弟子がペトロに、「主だ」と言った。シモン・ペトロは「主だ」と聞くと、裸同然だったので、上着をまとって湖に飛び込んだ。⁸ ほかの弟子たちは魚のかかった網を引いて、舟で戻って来た。陸から二百ペキスばかりしか離れていなかったのである。⁹ さて、陸に上がってみると、炭火がおこしてあった。その上に魚がのせてあり、パンもあった。¹⁰ イエスが、「今とった魚を何匹か持って来なさい」と言われた。¹¹ シモン・ペトロが舟に乗り込んで網を陸に引き上げると、百五十三匹もの大きな魚でいっぱいであった。それほど多くとれたのに、網は破れていなかった。¹² イエスは、「さあ、来て、朝の食事をしなさい」と言われた。弟子たちはだれも、「あなたはどなたですか」と問いたがそうとはしなかった。主であることを知っていたからである。¹³ イエスは来て、パンを取って弟子たちに与えられた。魚も同じようにされた。¹⁴ イエスが死者の中から復活した後、弟子たちに現れたのは、これでもう三度目である。¹⁵ 食事が終わると、イエスはシモン・ペトロに、「ヨハネの子シモン、この人たち以上にわたしを愛しているか」と言われた。ペトロが、「はい、主よ、わたしがあなたを愛していることは、あなたがご存じです」と言うと、イエスは、「わたしの小羊を飼いなさい」と言われた。¹⁶ 二度目にイエスは言われた。「ヨハネの子シモン、わたしを愛しているか。」ペトロが、「はい、主よ、わたしがあなたを愛していることは、あなたがご存じです」と言うと、イエスは、「わたしの羊の世話をしなさい」と言われた。¹⁷ 三度目にイエスは言われた。「ヨハネの子シモン、わたしを愛しているか。」ペトロは、イエスが三度目も、「わたしを愛しているか」と言われたので、悲しくなった。そして言った。「主よ、あなたは何もかもご存じです。わたしがあなたを愛していることを、あなたはよく知っておられます。」イエスは言われた。「わたしの羊を飼いなさい。¹⁸ はっきり言うておく。あなたは、若いときは、自分で帯を締めて、行きたいところへ行っていた。しかし、年をとると、両手を伸ばして、他の人に帯を締められ、行きたくないところへ連れて行かれる。」¹⁹ ペトロがどのような死に方で、神の栄光を現すようになるかを示そうとして、イエスはこう言われたのである。このように話してから、ペトロに、「わたしに従いなさい」と言われた。

※第 1 朗読と第 2 朗読は末尾に掲載

説教「朝の食事」

先日、ローマ・カトリックの教皇フランシスコが天に召されました。教皇フランシスコは、生前、このような言葉を残しています。「真の愛は、愛すると同時に愛されることです。愛を受け取ることは、愛を与えることより難しいものです」。

イエスは、十字架上で死んで復活したあと、何度か弟子たちの前に現れました。本日の福音書には、十字架上で死んで復活したイエスが、三度目に弟子たちの前に、愛をもって現れた場面が記されています。

それは、ティベリアス湖畔で起きたことでした。ティベリアス湖とはガリラヤ湖の別名です。その湖は、ペトロたちがイエスの弟子になる前に魚師をしていた湖でした。このことから、弟子たちが、イエスが十字架につけられたエルサレムを離れ、自分たちの故郷であるガリラヤに戻ってきていることが分かります。

弟子たちが、十字架の死から復活したイエスとエルサレムで出会い、イエスから聖霊を受ける大きな喜びに満ちた出来事（ヨハネ 20:19-22）の後に、なぜ故郷ガリラヤに帰って漁をしていたのか、その理由は記されていません。エルサレムでの生活は順調ではなかったのかもしれませんが。復活の主イエスと出会っても、それで目覚ましく人生が変わったわけではなく、挫折し停滞している弟子たちの姿が、ここに見られるようにも思えます。

このときペトロは「わたしは漁に行く」と言い、他の者たちも「わたしたちも一緒に行こう」と応答します（ヨハネ 21:3）。そしてみんなで舟に乗り込みました。

しかし、その夜は何もとれませんでした。現状を打破したい気持ちから、何かしなければと行動を起こしてみても、さっぱり上手くいかないということが、私たちの人生においてもあると思います。

しかし、弟子たちのそんな沈滞した状況の中、突如、光が差し込んできたかのように、突破口が開かれる出来事が起こります。

夜が明けたころ、イエスが岸に立っていたのです。夜の闇の中にいた弟子たちの前に、よみがえりのイエス・キリストが、自ら現れてくれたのです（ヨハネ 21:3）。

しかし弟子たちは、岸に立っていたその人がイエスだとは分かりませんでした。その時の弟子たちは、心の目が開かれていなかったため、その人がイエスだと気づけなかったのでしょう。

イエスは、弟子たちに「子たちよ、何か食べる物があるか」と呼びかけます（ヨハネ 21:5）。弟子たちが「ありません」と答えると、イエスは弟子たちに、舟の右側に網を打つように言いました。彼らがそのとおりにすると、網を引き上げることができないほど多くの魚がとれたのです（ヨハネ 21:6）。

イエスの愛しておられた一人の弟子は、岸にいる人物がイエスだと気づき、ペトロにあれば「主だ」と言いました。それを聞いたペトロは、主イエスのもとに急いで行くために、肌に着物をまとい、湖に飛び込みます。水に飛び込むとき、普通は着ているものを脱いでから飛び込むものですが、ペトロの場合は、裸のままでは主イエスの前に出られないと思ったのでしょう。逆に着物を着てから、湖に飛び込んだのです（ヨハネ 20:7）。

他の弟子たちも、魚のかかった網を引きながら、舟で岸に戻ってきました。彼らが陸に上がってみると、イエスは炭火をおこし、弟子たちのために食事の準備をしてくれていました。炭火の上に魚がのせてあり、パンもありました。さ

らに「今とった魚を何匹か持って来なさい」とイエスは言います（ヨハネ 20:10）。イエスはすべてを前もって用意して弟子たちを迎え入れ、かつ弟子たちの働きを無駄にもせず、彼らがとった魚もそこに加えたのです。

私たちは、主の恵みを受けるだけでなく、自らも主のわざに参加するように促され、またその喜びを享受できることが、ここに表されています。

先に陸に上がっていた弟子のシモン・ペトロが再び舟に乗り込んで、網を陸に引き上げると、百五十三匹もの大きな魚でいっぱいでした。それほど多くとれたのに、網は破れていません（ヨハネ 21:11）。それは、弟子たちが目の当たりにした、イエスの完全なわざと測り知れないほどの大きな恵みでした。

イエスは弟子たちに向かって、「さあ、来て、朝の食事をしなさい」と言います。「あなたはどなたですか」と聞く者は誰もいませんでした（ヨハネ 21:12）。もはや全員が、この人は復活のイエスだと分かっていたのです。イエスはパンを取って弟子たちに与え、魚も同じようにしました（ヨハネ 21:13）。

朝は、希望の象徴です。イエスが十字架上で殺される前に弟子たちと食卓を共にした「最後の晩餐」は夜に行われたのに対し、この湖畔での食事は朝に行われました。それは復活の主イエスによる、光にあふれた新しい宴の時でした。彼らは、希望と喜びに満ちた、至福の時を過ごしたことでしょう。

食事が終わるとイエスは、シモン・ペトロに「ヨハネの子シモン、この人たち以上にわたしを愛しているか」と尋ねました（ヨハネ 21:15）。「この人たち以上に」とは、「すべてに優って」ということでしょう。イエスはペトロに「最上の愛」を求めたのです。

それに対し「はい、主よ、わたしがあなたを愛していることは、あなたがご存じです」と答えるペトロに、イエスは再び、わたしを愛しているかと問いました。そして三度にわたって「わたしを愛しているか」とペトロに尋ねたのです。

イエスが三度ペトロにそれを問いかけたのは、イエスが殺される前に逮捕された時に、ペトロが三度イエスを知らないと言った出来事が背景にあります。

イエスから三度「わたしを愛しているか」と問われたペトロは、三度「わたしがあなたを愛していることは、あなたがご存じです」と答えました。

イエスとペトロのこの対話は、イエスを裏切った後ろめたさに苦しむペトロにとって、自分の弱さと限界にイエスと共に向き合い、イエスの愛とゆるしを受け取る恵みの時だったと言うことができるでしょう。

さて、5月に入り、だんだんと日も長くなってきました。

先日、私は、夕暮れの日が沈む間際に、燦然と空に輝く太陽の光を目にした時、その太陽の光が神の愛のように感じました。

夕方、日が沈む前の、まだほのかに明るい空に輝いていた太陽は、明け方、弟子たちの前に現れたイエスの姿とも重なります。日が沈む前の夕方の空と、明け方の空は、ほのかに明るいという点が共通していると思います。

神の愛に感じられたその太陽の光を見たとき、その愛を一身に受け取ろうと感

じました。

また、その太陽の光を見て、こうも感じました。「私たちは、いやされなければならない」。「私たちは、救われなければならない」。

私たちは、自分自身の過去を振り返ったとき、失敗や挫折の多い人生だったと、感じることもあるかもしれません。ですが、これまでのそんな自分の人生すべてに、温かく微笑みを向けてみてください。

そして、自分が失敗したと思っているそれらのことは、本当は失敗ではなく、神の計画のもとになされたことであり、のちに神の栄光があなたに現れるためのものであることを覚えていてください。

私たちは、神から与えられた愛によって隣人を愛し、神と人からの愛を受け取りながら、希望と喜びのうちに共に歩んでいきましょう。

お祈りをいたします。

天の父なる神様。あなたの御子は、私たちの弱さを知り、私たちを助けるために良いものを備えていてくださいます。私たちが痛みや苦しみの中にいるときも、その私たちを包み、受け入れてくださる愛を、私たちが受け入れることができますように。御子 主イエス・キリストによって祈ります。アーメン

***** 説教ここまで *****

以下、本日に関連する聖書箇所（第1朗読と第2朗読）です。

新約聖書 使徒言行録 9章1節—6節（新共同訳）

¹さて、サウロはなおも主の弟子たちを脅迫し、殺そうと意気込んで、大祭司のところへ行き、²ダマスコの諸会堂あての手紙を求めた。それは、この道に従う者を見つけ出したら、男女を問わず縛り上げ、エルサレムに連行するためであった。³ところが、サウロが旅をしてダマスコに近づいたとき、突然、天からの光が彼の周りを照らした。⁴サウロは地に倒れ、「サウル、サウル、なぜ、わたしを迫害するのか」と呼びかける声を聞いた。⁵「主よ、あなたはどなたですか」と言うと、答えがあった。「わたしは、あなたが迫害しているイエスである。⁶起きて町に入れ。そうすれば、あなたのなすべきことが知らされる。」

新約聖書 ヨハネの黙示録 5章11節—14節（新共同訳）

¹¹また、わたしは見た。そして、玉座と生き物と長老たちとの周りに、多くの天使の声を聞いた。その数は万の数万倍、千の数千倍であった。¹²天使たちは大声でこう言った。「屠られた小羊は、／力、富、知恵、威力、／誉れ、栄光、そして賛美を／受けるにふさわしい方です。」¹³また、わたしは、天と地と地の下と海にいるすべての被造物、そして、そこにいるあらゆるものがこう言うのを聞いた。「玉座に座っておられる方と小羊とに、／賛美、誉れ、栄光、そして権力が、／世々限りなくありますように。」¹⁴四つの生き物は「アーメン」と言い、長老たちはひれ伏して礼拝した。

教会讃美歌 290番「ガリラヤの風」、238番「いのちのかて」、254番「つかれしものに」、289番「すべてのひとに」。